

写真集で知る海外事情

石井美千子

文章だけでは理解できないことを写真が雄弁に伝えてくれることがある。世界の国々で起きていることや異文化社会のすべてを直接目にすることはできないが、写真で見ることによって私たちは多くの情報を得ている。ここでは、アジア経済研究所図書館所蔵の写真集を紹介してみたい。

共同通信社・陝西日報社・講談社編『近代化への道程 中国・激動の四〇年』（講談社 一九八九）は、中華人民共和国成立から七〇年代末の現代化路線の時期までの激動の時代をたどる写真集。一九八八年に中国で全国写真コンクール優秀作品展が開催されたが、これは一年後に日本でも開催され、本書が収録しているのはその時の展覧作品である。報道写真的なものだけでなく、周恩来、鄧小平ら指導者の日常を写した写真も多い。最後に紹介されているフェーク写真は衝撃的だ。「やらせ」ばかりか、実際はいなかった人が写っていたり、実際はいった人が消されていたり。政治的意図の下で捏造さ

れたこれらの写真の真実が公表された時、人々は激しい怒りを示したという。写真というものが持つ意味を考えさせられる。

ベトナム研究会編『ベトナム』（樫崎弥之助 一九六六）は、樫崎弥之助氏を中心とする社会党代議士グループが一九六六年に空襲下のハノイを訪問した後、その実態を伝える責任を果たすために作ったという写真集である。樫崎氏が街中の一人用防空壕から半身をのぞかせている写真など訪問中の写真もあるが、大部分は別途収集した写真のようだ。それらの写真からは戦争の中を生きる人々の日常が伝わってくる。戦場の写真では「激戦で頭がくるった米軍兵士」、「家を失った農民を救出する米兵」、「故郷からの便りに喜ぶ韓国兵士」、「参戦する山岳民族女子兵士」など、思わず目をためてしまうものが多い。カンボジアでは内戦中に約六〇〇万個の地雷が埋められたという。戦闘が終わっても地雷によって負傷した人々がカンボジアには数多く存在す

る。写真・小林正典／文・藤原健『対人地雷 カンボジア』（毎日新聞社 二〇〇二）は、地雷によって手足を失った人々や失明した人々の姿をと

おして地雷の恐ろしさを訴える。悲惨な負傷を負ったにもかかわらず、彼らの多くが大変な表情で写っている。地雷の恐怖の中で人々がたくましく生きていることも伝わってくる写真集である。

ピーター・ビード著『ジ・エンド・オブ・ザ・ゲーム』（リプロポート 一九九三）は、東アフリカに乗り込んだ西洋人によって野生動物が棲息するサバンナが征服されていった歴史を記録するもの。写真家としてだけでなく幅広くアーティストとして活動している著者が大変詳細なドキュメントとメッセージを執筆している。本書のタイトル「ゲームの終わり」とは、獵獣とハンター（人間）の狩るか狩られるかという関係が、支配し保護する人間と、保護される動物という関係に変容したことを意味する。そしてそれは自然破壊の始まりである、というのが著者のメッセージである。生きる場を狭められて死んでいった象のたくさんの屍の写真が痛ましい。

次に洋書から趣の異なるものをいくつか紹介しよう。

“Mahatma Gandhi” (Publications Division, Ministry of Information and Broadcasting, Govt. of India, 1954) は、マハトマ・ガンジーの生涯を写真でたどる、目で見ると伝記である。七歳から七八歳で茶毘にふされるまで、約五〇〇枚の写真が収められている。偉大な人物の写真は、説明など読まなくても訴えかけてくるものがある。

王族が国民に敬愛されているタイでは、国王をはじめとする王族の写真の出版が盛んである。“Special photo exhibition of Thai and Japanese royal families” (1990) は、国王の母シーナカリン王太后の九〇歳の誕生日と日本の天皇即位を祝して開催された写真展の際に作成されたもので、前半はタイ王室、後半は日本の皇室の写真を収録する。それぞれの系譜図、日タイ王室・皇室交流年表も掲載している。皇太子時代の日本を訪れたラーマ七世の羽織袴姿の写真など、時代をさかのぼった写真もある。タイの別の側面が見られるのが Philip Blenkinsop “The cars that ate Bangkok”

(White Lotus, 1996) だ。荒っぽい運転で知られるバンコクの交通事故写真集である。血まみれの怪我人の写真など、目を覆いたくなるものもあるが、タイの大衆紙ではそういう写真を掲載するのは普通のこと、そういう意味でもタ

イらしい写真集である。 Jacqueline Hassink “Domains of Influence” (I.B. Tauris, 2008) は、中東アラブ諸国のビジネスリーダーの女性たちを紹介する本だが、この本がユニークなのは、彼女たちの履歴とともに掲載されているのが顔写真ではなく（顔写真は一切無）、彼女たちの執務室、会議室、自宅のリビングルーム、ダイニングルームの写真であるということだ。女性たちの二つのテリトリーを見せるといふ狙いだが、そのどれもが素晴らしくゴージャスで驚かされる。こういうものも写真集ならではの情報といえるだろう。

以上、ほんの一部しか紹介できなかったが、ほかにも貴重な写真集、興味深い写真集は多くある。機会があれば是非、ご覧いただきたいと思う。

（いい） みちこ／アジア経済研究所図書館